

令和7年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第4号（7月）

令和7年6月25日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：葉いもちの発生量は平年並の予想です。本田の見回りを徹底し、早期発見に努め、発病が見られた際は直ちに治療効果のある薬剤を散布してください。

斑点米カメムシ類の発生量は多い予想です。斑点米カメムシ類の密度低減のため、畦畔・農道等の継続的な除草と水田内の残存雑草対策を徹底してください。

園芸作物：おうとうの褐色せん孔病、果樹共通害虫の果樹カメムシ類の発生量は多い、りんごの褐斑病、日本なしの黒星病の発生量はやや多い予想です。散布間隔があきすぎないように注意し、散布ムラのないように防除を徹底してください。

秋冬ねぎのシロイチモジヨトウ、野菜・花き共通のオオタバコガはやや多い予想です。圃場を見回り早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底してください。

※ 次回の発表は7月30日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
いね	葉いもち	—	平年並
	紋枯病	—	平年並
	斑点米カメムシ類	—	多い
	コバネイナゴ	—	少ない
りんご	斑点落葉病	—	平年並
	黒星病	—	平年並
	褐斑病	—	やや多い
	せん孔細菌病	—	平年並
	輪紋病	—	平年並*
	黒星病	—	やや多い
	褐色せん孔病	—	多い
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並
	果樹カメムシ類（り・も・な・か）	—	多い
	モモシンクイガ（り・も・な）	—	やや少ない
ナシヒメシンクイ（り・も・な）	—	平年並	
ナミハダニ（り・も・な・お）	—	平年並	
夏秋きゅうり すいか メロン 秋冬ねぎ 野菜・花き 共通害虫	べと病	—	平年並
	斑点細菌病	—	平年並
	炭そ病	—	平年並
	つる枯病	—	平年並
	斑点細菌病	—	平年並
	つる枯病	—	平年並
	ネギアザミウマ	—	平年並
	ネギハモグリバエ	—	平年並
	シロイチモジヨトウ	—	やや多い
	アブラムシ類（夏・す・メ・え・き）	—	平年並
ハダニ類（夏・す・メ・え・き）	—	平年並	
オオタバコガ（夏・す・メ・ね・え・き）	—	やや多い	

* 感染量

()内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし、日本なし）、お：おうとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、メ：メロン、ね：秋冬ねぎ、え：えだまめ、き：きく

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項等について記載しています。

作物名	病害虫名
いね	ばか苗病、稲こうじ病・墨黒穂病、フタオビコヤガ、セジロウンカ・コブノメイガ
	ジャガイモヒゲナガアブラムシ
だりんず ぶんど	輪紋病・炭そ病
	灰色かび病・晩腐病
もも	灰星病
	輪紋病
日本なし	円星落葉病、フジコナカイガラムシ
	褐色腐敗病・疫病
すいか	さび病
	アザミウマ類

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agrin.jp/theme/byogaichubojosho/index.html	
農作物有害動植物発生予察情報	https://agrin.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和7年6月1日～8月31日

防護装備着用の徹底で身を守る！ 防除器具は確実に洗浄を！

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに表示されている記載事項をよく読んで、正しく使用しましょう。
 - ①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬の調製、散布及び防除器具の点検や洗浄を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用しましょう。また、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)
○農業技術環境課(023-630-3419)
○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)
○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット <https://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所
・山形市保健所(023-616-7261)
・村山保健所(023-627-1248) ・最上保健所(0233-29-1257)
・置賜保健所(0238-22-3872) ・庄内保健所(0235-66-5478)
○健康福祉企画課(023-630-2332)

公園等病害虫等管理
マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 農薬は、農林水産省登録番号のある登録農薬を必要量だけ計画的に購入する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、事前に地域住民や周辺生産者等との連携を密にして事故防止に努める。**
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるミツバチへの危害を防止する。
5. 水田では、農薬散布後は7日間止水し、落水やかけ流しはしない。なお、農薬が河川中に流出しないよう畦畔の補修等を行う。
6. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (+) : 発生量を多くする要因 (-) : 発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉いもち	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在、本田での発生は確認されていない（平年：6月25日）。
- イ. 6月20日の生育調査では、いねの葉色は平年並である。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並、日照時間は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 本田の見回りを徹底し、早期発見に努め、発病が見られた際は直ちに治療効果のある薬剤を散布する。特に、7月中旬以降は葉いもちが広域で確認される時期を迎えるため、注意深く観察する。
- イ. 窒素過多は発病を助長する恐れがあるため、適正な肥培管理に努める。
- ウ. QoI 剤（ストロビルリン系薬剤）耐性菌が全県で確認されているため、薬剤の選定に留意する。

(2) ばか苗病

6月後半の巡回調査の結果、周辺圃場におけるばか苗病の発生圃場率は20.5%（平年：4.3%）で多い。本田に発病株が残っていると次作の伝染源となる場合があるため、出穂期までに見つけ次第抜き取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 紋枯病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 6月20日の生育調査では、いねの茎数はやや少ない。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。(+))

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる圃場では、圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に穂孕後期または出穂期の防除を行う。
- イ. 薬剤は株元によく付着するようていねいに散布する。

判定時期	防除の判断基準
穂孕後期	発病株率 10%以上で防除
出穂期	発病株率 15%以上で防除

※ 1筆当たり5条おきに20株の計100株を水田中央部まで調査

(4) 稲こうじ病・墨黒穂病

穂孕期から出穂期頃の降雨により感染が多くなるため、前年発生が見られた圃場や、例年発生が見られる圃場では下記の対策を実施する。

- ア. 出穂20～10日前までに薬剤防除を行う。
- イ. 銅剤を使用する場合は、出穂期近く及び葉が濡れている時に散布すると薬害の恐れがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) 斑点米カメムシ類 (アスジカスミカメ ・アヒゲホリミドリカスミカメ ・オトゲシホシカメムシ)	多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月後半の巡回調査の結果、畦畔・農道等における発生確認地点率は高く、平均すくい取り虫数はやや多い。(+))
- イ. 周辺圃場における畦畔雑草の発生圃場率がやや高い。(+))
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。(+))

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 斑点米カメムシ類の密度低減のため、生息地である畦畔、農道及び雑草地の草刈り及び除草剤散布、または、休耕田の耕耘作業等による雑草対策を徹底する。
- イ. 水田周辺の雑草対策は、水稻の出穂期前後に行うと斑点米カメムシ類の水田侵入を助長するため、出穂2週間前(7月中旬頃)までに実施する。また、広域で一斉に実施すると効果が高いため、地域ぐるみで実施する。
- ウ. 県内の主要種であるアスジカスミカメは、イヌホタルイやノビエの穂に産卵し繁殖するため、水田内に残存した雑草対策も徹底する。

(6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)

6月後半の巡回調査の結果、発生量は少ないが、圃場をよく観察し、発生が多い場合には被害初期 (葉先がカスリ状になった時) に薬剤を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(7) コバネイナゴ	少ない

1) 予報の根拠

6月後半の巡回調査の結果、発生量は少ない。(一)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 7月上旬の水田内における20回すくい取り虫数が100頭以上の場合は防除を行う。なお、乳剤を散布する場合は畦畔等も含めて散布する。

イ. 薬剤防除を行う場合は、乳剤では散布前に、粒剤では散布2、3日後に畦畔の草刈りを実施すると効果が高まる。

(8) セジロウンカ・コブノメイガ

6月23日現在、セジロウンカの飛来が確認されている。今後、低気圧や前線の通過に伴って大量に飛来することがあるので、発生動向に注意する。

2. だいず

(1) ジャガイモヒゲナガアブラムシ

寄生密度が急激に高まることがあるので、圃場を十分に観察し、今後の発生動向に注意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 黒星病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量はやや少ない。(－)
- イ. 6月以降に感染好適条件の出現頻度が高い。(＋)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉及び発病果は、二次感染の伝染源となり、その胞子の飛散時期は収穫まで長期間に渡るため、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。また、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。
- イ. 7月下旬までは重点防除時期となるので、薬剤散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒しして降雨前に散布し、散布間隔を10日間以上あけないようにする。なお、降雨が続く場合には、雨の合間を見て散布を行う。
- ウ. 薬剤散布に当たっては、十分な薬液量(5000以上/10a)で、果実にも十分量付着するようていねいに散布する。また、スピードスプレーヤにより防除する場合は、散布速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 褐斑病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量はやや多かった。(+)
 - イ. 子のう胞子の初飛散(4月23日)後、子のう胞子の飛散が継続している。
 - ウ. 6月23日現在、発生は確認されていない(平年初確認日:7月16日)。
 - エ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる園や前年発生が多い園では、薬剤防除を徹底する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。
- ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、散布ムラが生じないようにいねいに薬剤散布を行う。

(4) 輪紋病・炭そ病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。また、炭そ病の発病果は二次伝染源となるので見つけ次第摘み取り適切に処分する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病・晩腐病

圃場をよく見回り、発病果は二次伝染防止のため見つけ次第摘み取り適切に処分する。薬剤防除を行う場合は、果房が汚れないように注意する。

3. もも

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) せん孔細菌病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をこまめに見回り、発病枝は見つけ次第せん除し適切に処分する。なお、一度せん除した枝でも再び病斑が発生する場合があることから、病斑部だけでなく可能な限り健全部を含めて基部からせん除する。
- イ. 発病葉や発病果も二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- ウ. 例年発生が見られる園や風当たりの強い園では、防風ネットを設置する。
- エ. 発生が見られる園では、7月上旬まで約10日間隔で薬剤防除を行う。また、降雨が続く場合には、散布間隔があきすぎないように注意する。なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し、各薬剤の収穫前使用日数を厳守する。

(2) 灰星病

果実腐れの初確認日は6月13日（5か年平均：7月29日）であった。早生・中生種では、7月中旬から重要な防除時期に当たるので防除を徹底する。薬剤防除を行う場合は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。また、園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

4. 西洋なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 輪紋病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 柄胞子の初飛散確認日は6月5日（平年：6月10日）でやや早く、その後継続して柄胞子の飛散が確認されている。
- イ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 梅雨明けまでは重要な防除時期に当たるので、薬液が枝幹部にも付着するよう十分量散布する。
- イ. 降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。
- ウ. 果実への感染を防止するため、キャプタン・有機銅剤を使用する防除体系では、散布間隔を10日以上あけないようにし、本剤散布後からの積算降水量が100mmに達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量はやや多い。(+)
- イ. 6月中旬以降に感染好適条件が連続して出現している。(+)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 伝染源密度低減のため、園内の見回りを徹底し、発病部位（果実、葉）は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。
- ウ. 薬剤散布の際は、薬液到達性を高めるため、不要な徒長枝はせん除し、散布ムラが生じないように、十分量（3000以上/10a）の薬液を散布する。
- エ. 特に、園周縁部等の薬液のかかりにくい部位では、散布速度を下げる等により、ていねいに散布する。

(2) 輪紋病

重点防除時期に当たるため、7月中旬までの防除を徹底する。降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、薬剤選定に当たっては、黒星病にも効果のある薬剤を使用する。

6. おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 褐色せん孔病	多い

1) 予報の根拠

- ア. 前年秋季の発生量は多かった。(＋)
- イ. 6月後半の巡回調査の結果、全調査地点(9地点)で広く発病葉が確認された。
- ウ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 収穫終了後は速やかに薬剤防除を実施する。
- イ. 本病の葉への感染は秋季まで長期に渡り、雨よけ除去後は降雨により感染が多くなる。防除に当たっては、雨の合間をみて散布間隔があきすぎないように注意する。

7. か き

(1) 円星落葉病

前年被害落葉からの孢子飛散は、7月中旬頃まで続くので、例年発生が見られる園では、散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) チャノキアザミマ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月後半の巡回調査では被害果は確認されていない(平年初確認:8月上旬)。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

7月下旬までの防除を徹底する。なお、幼果とへたの隙間にも薬液が十分付着するようていねいに散布する。

(3) フジコナカイガラムシ

巡回調査圃場(鶴岡市)のフェロモントラップにおける越冬世代雄成虫の誘殺盛期は6月2半旬(前年:5月6半旬、前々年:5月5半旬)であった。アメダス鶴岡の気温データに基づく第1世代幼虫の発生ピークは、6月6半旬と予測されているため、発生が見られる園では、7月上旬にも効果のある薬剤を使用する。重要な防除時期に当たるため、枝幹や葉、へた部に十分かかるようていねいに薬剤散布を行う。

8. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネオカメムシ)	りんご・もも・なし ・かき	多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月4半旬までの集合フェロモントラップにおけるチャバネオカメムシの総誘殺数は、県予察圃場では11頭（平年：4.7頭）、農研センターでは28頭（平年：4.8頭）、鶴岡市では541頭（平年：42.9頭）といずれも多かった。（+）
- イ. 6月4半旬までの予察灯におけるクサギカメムシの総誘殺数は、県予察圃場では27頭（平年：1.1頭）、農研センターでは13頭（平年：0.2頭）、水田農業研究所（鶴岡市）では9頭（平年：0.1頭）といずれも多かった。（+）
- ウ. もも、西洋なし、日本なしでは果樹カメムシ類による被害果が確認されている。
- エ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 気温や湿度の高い日に果樹カメムシ類の飛来が多くなる傾向が見られる。
今後、越冬後成虫に加えて新成虫も発生して密度が高まるため、園内を十分に見回り、樹上の寄生や被害果の発生に注意する。
- イ. 成幼虫の寄生や卵塊、被害果が見られる場合は、速やかに捕殺するとともに薬剤散布を行う。
- ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病虫害防除基準」を参照し、カメムシ類に効果の高い剤で防除を実施する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) モモシンクイガ	りんご・もも・なし	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 県予察圃場（寒河江市）のフェロモントラップにおける初誘殺は、6月23日現在確認されていない（平年：6月3半旬）。
- イ. 前年の発生量はやや少なかった。（-）
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 7月は重要な防除時期になるため、薬剤の選定に留意し、散布間隔があきすぎないように防除を行う。特に前年に果実被害が見られた樹では、周辺で羽化した雌成虫による果実への産卵が集中しやすいため、防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 園内を見回り、心折れや被害果は、見つけ次第摘み取り適切に処分する。

イ. 被害が見られる園では、薬剤の選定に留意し、防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(4) ナミハダニ	りんご・もも・なし ・おうとう	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の気温は、高いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合がありますので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当り3頭以上見られたら殺ダニ剤を散布する。

イ. ナミハダニの下草における増殖を抑制するため、園内の除草を励行する。なお、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、除草後に殺ダニ剤を散布する場合は下草が枯れるまで待って行う。

ウ. 樹冠内部の散布ムラを生じないように不要な徒長枝はせん除し、薬液到達性を高め、十分量の薬液をていねいに散布する。

エ. おうとうでは収穫終了後に速やかに雨よけを除去し、殺ダニ剤を散布する。

9. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) ベと病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月23日現在、発生は確認されていない(平年初確認:7月上旬)。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 薬剤散布は予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

ウ. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。
- ウ. 無機銅を含む剤は薬害の恐れがあるので、散布時は必ずクレフノンを加用するとともに、高温時の散布は避ける。
- エ. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

10. すいか

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月中旬）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 通風を良くし、過繁茂にならないよう栽培管理に注意する。
- イ. 薬剤散布は予防防除を基本とし、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) つる枯病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在、発生は確認されていない（平年初確認：6月下旬）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 通風を良くし、過繁茂にならないよう栽培管理に注意する。
- イ. 薬剤散布は予防防除を基本とし、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

(3) 褐色腐敗病・疫病

降雨が続いたり、圃場内に雨水が滞水した場合に突発的に発生することがあるの
で以下の対策を実施する。

- ア. 排水不良地では明きよを設置する等、排水対策を徹底する。また、すいかマット
を設置し果実への感染を防止する。
- イ. 降雨により圃場が滞水した場合には、速やかに排水を行い、薬剤散布を行う。
- ウ. 発病果は直ちに除去し、適切に処分する。

11. メロン

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は、発生前からの予防防除を基本とし、薬液が葉裏や果実に十分付着
するようていねいに行う。
- イ. 強い風雨が予想される場合は、事前に薬剤散布を行い、風雨が激しかった場合
は、傷口保護のため、風雨の後にも薬剤散布を行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除
を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒して散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) つる枯病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は、発生前からの予防防除を基本とし、薬液が株元や葉裏まで十分付
着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除
を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒して散布を行う。

12. 秋冬ねぎ

(1) さび病

内陸地域、庄内地域ともに発生は確認されていない（平年初確認 内陸：7月上旬、庄内：6月中旬）。降雨が続くと発生が多くなるため、以下の対策を実施する。

- ア. 肥切れや多肥栽培で発病が多くなるので、適切な肥培管理を行う。
- イ. 潜伏期間が長いため、発生前から防除を行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行い、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒して散布を行う。
- エ. 一部の品種（関羽一本太等）では発生しやすいため注意する。
- オ. 発生が見られた場合は、圃場内で広く感染している恐れがあるため、速やかに薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) ネギアザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 雑草は発生源となるため、圃場周縁部を含めて除草を徹底する。
- イ. 粒剤を使用していない場合は、直近の土寄せ時に処理を行う。すでに粒剤を使用している場合は、前回処理の1か月後を目安に2回目の処理を行う。
- ウ. 高温乾燥が続くと急激に増殖する可能性があるため、圃場を見回り早期発見に努め、発生初期から薬剤散布を行う。
- エ. 薬剤散布を行う場合は、散布ムラが生じないように、生育ステージに応じて十分な薬液量を散布する。
- オ. 薬剤選定に当たっては、薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ネギハモグリバエ	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 粒剤を使用していない場合は、直近の土寄せ時に処理を行う。すでに粒剤を使用している場合は、前回処理の1か月後を目安に2回目の処理を行う。
- イ. 高温乾燥が続くと急激に増殖する可能性があるため、圃場を見回り早期発見に努め、発生初期から薬剤散布を行う。
- ウ. 薬剤散布を行う場合は、散布ムラが生じないように、生育ステージに応じて十分な薬液量を散布する。
- エ. 薬剤選定に当たっては、薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) シロイチモジヨトウ	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. フェロモントラップにおける6月4半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）で28頭（平年：3.6頭、前年19頭）、地区予察圃場（酒田市）で66頭（平年：15頭、前年：58頭）といずれも多く、6月3半旬以降まとまった誘殺が見られている。（+）
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。
- イ. 卵塊や、ふ化直後の幼虫の集団が見られる葉は、取り除き適切に処分する。
- ウ. 幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するため、卵塊や初期被害（葉の先端部が透ける被害）が確認された場合は、速やかに薬剤防除を行う。
- エ. 薬剤散布を行う場合は、散布ムラが生じないように、生育ステージに応じて十分な薬液量を散布する。
- オ. 前線や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

13. きく

(1) アザミウマ類

- 6月23日現在、調査圃場において発生は確認されていないが、気温の上昇に伴って密度が高まるため、圃場をよく観察するとともに以下の対策を実施する。
- ア. 圃場とその周辺の雑草にも寄生するので、除草を徹底する。
 - イ. アザミウマ類はウイルス（TSWV）を媒介するため防除を徹底する。
 - ウ. 薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
 - エ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布する。

14. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか・メロン・えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く降水量は平年並と予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場周辺の除草に努め、圃場内への有翅虫の飛来を防止する。
- イ. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・すいか・メロン・えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月23日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く降水量は平年並と予報されている。(+))

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一薬剤の連用を避ける。
- ウ. 気門封鎖剤は殺卵効果がないため、1週間間隔で2～3回散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) オオタバコガ	夏秋きゅうり・すいか・メロン・秋冬ねぎ・えだまめ・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月4半旬までのフェロモントラップにおける総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）で35頭（平年：18.4頭）、地区予察圃場（酒田市）で23頭（平年：0.6頭）といずれもやや多い。(+))
- イ. すいか及びメロンの花で幼虫及び被害が確認されている。(+))
- ウ. 向こう1か月の気温は、高いと予報されている。(+))

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。
- イ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤散布を行う。なお、薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。
- ウ. 薬剤散布に当たっては、生育ステージに応じた十分な薬液量で散布を行う。
- エ. 被害部位（果実、花蕾、新芽等）は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。
- オ. 前線や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。
- カ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。また、薬剤防除後にも被害の拡大が見られる場合には、異なるグループの薬剤を散布する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
や や 早 い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →		← 平 年 並 →				← やや少ない →		←少ない

東北地方 1か月予報（06/21～07/20）		
2025年06月19日14時30分 仙台管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月 06/21～07/20	天候	平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 06/21～06/27	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 06/28～07/04	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 07/05～07/18	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	東北地方	向こう1か月 06/21～07/20	
		1週目 06/21～06/27	
		2週目 06/28～07/04	
		3～4週目 07/05～07/18	
降水量	東北日本海側	向こう1か月 06/21～07/20	
	東北太平洋側	向こう1か月 06/21～07/20	
日照時間	東北地方	向こう1か月 06/21～07/20	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)